

【寄稿】 奥田勝利と今後

有馬, 守
元福岡県職員労働組合執行委員

<https://doi.org/10.15017/4842501>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 9, pp.383-384, 2022-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文
書館内)

バージョン：

権利関係：



【寄稿】

奥田勝利と今後

有馬 守

吉本隆明（1924～2012）は、戦時中は神国大日本帝国の八紘一宇を当然のことと思い、敗戦必至ながら軍部に引きずられた本土決戦という、亡国の方針を疑わない軍国青年であったと言う。戦後それまでの日本の軍国思想・社会体制・価値体系が全否定される中、彼自身も左翼陣営に身を投ずることになるがその間、「何故戦時中、自分はああ易々と軍国青年になっていたのか」という疑問を抱き続けていた。そして漸く 1968 年に至って、『共同幻想論』によりその答を出した。

「共同幻想」という言葉は、詩人であった吉本の実感の入った言葉遣いであり、社会心理学者が同じ概念を名付けるとしたら、「ヒトの集団における共同利益認識による共感」とでも言うであろうか。しかしそれでは頭上を吹き抜けてしまう。「幻想」という所に、挑発的だが本質を端的に突いている感がある。

ヒトが所属するあらゆる組織、夫婦・家族・地域・会社・趣味のグループ・プロ野球の応援・市町村国に至るまで、そこには共同幻想があり、それ故に組織が成り立ち、ヒトはむしろ積極的にその共同幻想に参加することで、大きな安心感を得る。しかしそれが、思わぬ方向に向かっている時もあるのである。それ故に吉本の結論は、共同幻想に流されず「自立せよ」であった。

ドイツの哲学者ハイデッガー（1889～1976）も、著書『存在と時間』において「世人（せじん）」という言葉を使い、吉本の共同幻想とほぼ同じ事を述べている。ハイデッガーはそういう分析を行ったにも拘わらず、当時隆盛したナチスに加担することになった。

現在進行中のロシアによるウクライナ侵略戦争においても、ロシアの国内では吉本の体験した「共同幻想」が、支配しているのではないだろうか。

1983 年福岡県知事選において、4 期続いた自民党の亀井県政を奥田八二氏が破り革新県政を実現した。奥田知事は少数与党ながらも、県内自民党の内部対立や国の消費税への不満等が加勢して 3 期も続き、その間情報公開制度の制定や、北九州空港の開設、トヨタ工場の誘致など県民本位の県政を推進することになる。

その年私は若干 33 才。福岡県職員労働組合の本部執行委員になってまだ 1 年目であった。奥田知事誕生後は、労働組合も公約であった県民本位の県政実現に協力するということで、自らの要求は控えて、春闘での 1 時間ストへの役員処分も甘んじて受けたのであった。

この度ひょんなことから大先輩の森山さんから、この年の『奥田日記』の活字化を依頼された。それはとても興味ある作業ではあったのだが、他事にかまけて最後まで全うできなかった。しかし目にした奥田日記には、公示の前から県内を東奔西走し、行く先々で所謂革新という側の団体だけではなく、中立的な、また保守層の一部団体からも歓迎され、激励される情景が溢れている。知事4期目を終わり、「権力を恣にしている亀井県政」の構図が県民にも見え出した中、5期目は許さないという県民規模の「共同幻想」が、奥田知事の誕生を実現させたのではないだろうか。

現在「共産主義」という思想は、ソ連の崩壊や中国や北朝鮮の国内の専制政治及び独断的外交によって、ズタズタにされてしまった。そこに人々が未来や希望を望むことは困難になっている。しかし、今のままで良いとも思えない。

思うのは国という枠を超えて、人類という視点で、地球を守るため何かをしていくということである。2015年に採択された国際連合の「SDGs17の目標」はもっと啓発されるべきであり、昨年1月に発効した核兵器禁止条約は、世界各地で推進している人々と連帯して、必ず実現させるという希望を持ちたい。